

平成22年度第2回企画ロビー展
公文書に見る幕末維新の群像

～東京文化財ウィーク2010公開事業～

会期 平成22年10月25日～12月24日

会場 東京都公文書館1階ロビー・展示コーナー

【ごあいさつ】

平成16年3月、「東京府及び東京市関連行政文書」およそ3万3千点余が、一括して都指定有形文化財（歴史資料）に指定されました。

東京都公文書館では、毎年文化財ウィークの時期に当館所蔵の文化財をご覧いただく企画資料展を開催しております。

今年度は「公文書に見る幕末維新の群像」というタイトルで、皆様になじみのある人物たちの姿を公文書の中に探ります。

福沢諭吉・榎本武揚・勝海舟・西郷隆盛といった幕末維新期の先覚者、近代女子高等教育の礎を築いた下田歌子・津田梅子、さらには坂本龍馬の婚約者として知られる千葉さなや元新撰組局長近藤勇らに関わる文書を通して、とかく堅くて難しいものと思われがちな公文書を、より身近なものと感じていただければ幸いです。

東京都公文書館

【展示ケースⅠ 福沢諭吉 ～ 海賊出版を糺弾する】

ここでは福沢諭吉に関連して、慶應義塾の開学申請書とともに、自著『西洋事情』の偽出版に関わる公文書を紹介致します。

明治2年(1869)10月、福沢は『西洋事情』の偽版が官許を受けて販売されていた件が、前年に発覚以来いまだに解決していないとし、東京府に訴え出ました。偽版の差し止めと版木の没収を強く求める内容でした。なお、この訴状の肩書きは「読書翻訳渡世」と記されており興味深いところです。

この一件書類に添付されていたのがここに展示した自筆の書簡です。ここには偽出版の当事者である元膳所藩士黒田行次郎との直接のやり取りが記録され、必死に詫げる同人に対して「偽版ハ天下文化之一大害」とし厳しく指弾しています。

(展示資料)

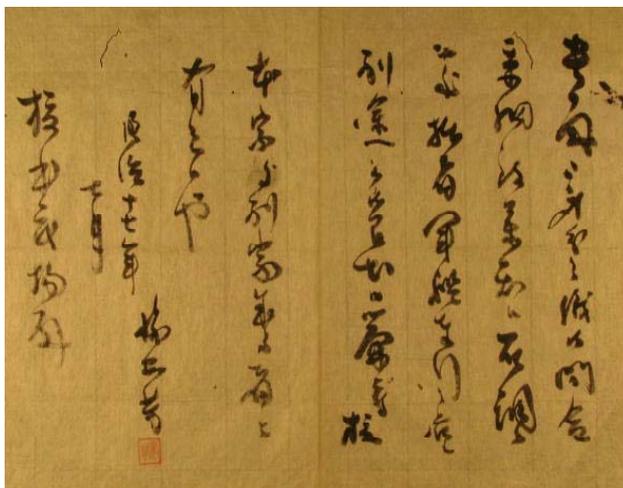
- ・ 福沢諭吉自著西洋事情偽板之儀ニ付歎願書 明治2年(1869)10月
 (『明治七年・願』 606・A7・17-1)
- ・ 私学慶應義塾開業願 明治6年(1873)4月
 (『明治六年・開学願書』 606・C5・3)

【展示ケースⅡ 榎本武揚 ～ 士族編入・戸籍騒動】

明治17年(1884)8月、榎本武揚は兄武與と連名で、戸籍を兄と別籍とすることを願いました。

元々旧幕府の時代から自分は兄とは独立した士族であったのだが、維新後静岡県に移されていた兄の戸籍に、自分の家族の戸籍を誤って編入してしまったというのです。

このことに気づいた武揚は旧幕府時代の彼をよく知る勝海舟(安芳)に口添えを頼み、その文書を添えて出願しました。しかしいくら政府の重要人物といっても対応は慎重に行われ、翌年、元老院議官・元東京府知事で、これまた旧幕時代の事情を知る大久保一翁の保証書も提出され、ようやく18年5月1日正式に士族編入の事が通達されました。



(展示資料)

- ・ 戸籍之儀ニ付願(榎本武揚別籍取扱出願) 明治17年(1884)8月
『明治十八年・稟議録・官省・庶務課』 614・B3・15)
- ・ 勝海舟(安芳)回答書簡(榎本武揚兄と別家の旨) 明治17年(1884)7月
『明治十八年・稟議録・官省・庶務課』 614・B3・15)
- ・ 大久保一翁添申書(榎本武揚家格ニ付保証書) 明治18年(1885)2月
『明治十八年・稟議録・官省・庶務課』 614・B3・15)
- ・ (榎本武揚士族編入之儀東京府知事より通告) 明治18年(1885)5月
『明治十八年・稟議録・官省・庶務課』 614・B3・15)

【展示ケースⅢ 西郷隆盛 ～ 幻に終わった軍服の西郷像】

西南戦争の戦端が開かれようとしていた明治10年(1877)2月25日、政府は西郷隆盛らの官位を剥奪しました。それは西郷を通じた鎮撫策を断念し、征討戦争を本格的に開始する宣告でもありました。「至急」印の捺された公文書は、大規模な内戦へ至る緊張の中で収受されたものです。

西南戦争から12年後の明治22年、西郷隆盛は正三位を追贈され名誉回復がなりました。その翌年には薩摩出身の樺山資紀・九鬼隆一を发起人として「宮城正門外広場之中」へ故西郷隆盛の銅像建設が出願されました。

しかしこの時には正式決定に至らず、ようやく明治26年、上野公園地内に場所を移して建設が認められました。ところが同年7月、发起人両名は銅像建設につき服装のことを陸軍大臣に伺い出て却下されています。この時の伺いの内容は、文書そのものが返却され

ているため不明ですが、わざわざ陸軍大臣に確認している以上、軍服姿の銅像製作に許可を願ったことは間違いないでしょう。

結局、この時にも着工に至らず、着物姿で犬を連れた西郷さんの姿が完成するのは明治31年のことでした。

軍服を着て皇居前に立つ西郷隆盛像は幻に終わったこととなります。

(展示資料)

- ・陸軍大将西郷隆盛外二名官位被褌候条鹿兒島県へ達 明治10年(1877)2月
『明治十年八月・行在所布告達・電報』 608・A3・21)
- ・上野公園地内へ西郷隆盛銅像建設之義裁可ニ付通知 明治26年(1893)4月
『明治二十六年・稟申録・第二課』 620・D3・6)
- ・宮城正門外広場ノ中西郷隆盛紀念銅像建設願 明治23年(1890)7月
『明治二十五年・稟申録・第二課』 619・C6・4)
- ・添翰願(陸軍大臣宛西郷隆盛銅像服装伺ニ付) 明治26年(1893)7月
『明治二十六年・稟申録・第二課』 620・D3・8)

【展示ケースⅣ 女性たちの近代】

こちらの展示ケースでは、近代女子高等教育の確立に尽力した2人の女性教育者を取り上げます。

実践女子大学の設立者・下田歌子と、津田塾大学の前身、女子英学塾の設立者・津田梅子です。ともに幕末に生まれ、欧米留学の経験を活かしつつ、黎明期にあった女子教育の道を切り開いていきました。

今ひとりここで紹介するのは、千葉周作の弟・千葉定吉の二女、自身も小太刀に皆伝の腕を発揮し、坂本龍馬の婚約者として知られる千葉さなです。

明治維新後、学習院女子部に舎監として勤め、のち千住で鍼灸院を営んだことが知られています。今年、千住の居所が郡役所用地とされ移転を余儀なくされた折の公文書が、当館閲覧者の方により発見されました。「発見」を伝える新聞記事とともにご紹介しています。

(展示資料)

- ・女子英学塾設立願書 設立者 津田梅子 明治33年(1900)7月
『明治三十三年・文書類纂・学事』 616・D3・4)
- ・実践女学校設立願書 設立者 下田歌子 明治32年(1899)4月
『明治三十二年・第三課文書学務』 623・B6・1)
- ・御受取(建物等移転料承諾ニ付) 千葉さな 明治20年(1887)1月
『明治二十年・本庁命令録・庶務課』 616・D3・4)

【展示ケースV 公文書にみる新撰組】

ここでは近代公文書の中の新撰組隊士を紹介致します。

まず、局長の近藤勇です。文久3年(1863)上洛し、局長として新撰組を率い、池田屋事件などにより尊王攘夷派の浪士たちの鎮圧に活躍しました。最期は官軍により板橋宿で捕縛、斬首に処せられましたが、明治7年、維新政府に背いて戦死した者の埋葬を許可する太政官達が出されたのを受け、翌8年、下板橋宿の高野弥七郎から東京府に、元新撰組局長・近藤勇の墓碑建立が出願されました。

また、高台寺派の隊士は、薩摩藩に匿われて東京府貫属士族になったため、名前が公文書にみえます。ここでは加納道之助(通広)^{みちひろ}(1839 - 1902)と篠原泰之進(泰泰之進)(1828 - 1911)に関する記録を紹介致します。加納・篠原は新撰組から分派して活動したため、維新の功績者としてその経歴が東京府に報告されています。

(展示資料)

- ・近藤勇墳墓取立願書 明治8年(1875)11月
(『明治九年・御墓所墓地葬儀』 607・D5・7)
- ・加納道之助 履歴調査ノ件 明治26年(1893)10月
明治26年6月も内務省は明治維新に尽力しながら死亡し贈位を受けていない者、生存者であっても叙位等の荣誉に浴していない者の調査を実施しました。これに応じて芝区役所が元新撰組・加納道之助の功績を書き上げた書類です。板橋宿で近藤勇を捕縛した際、官軍側にあつてその人物を見破ったのが加納でした。
(『明治二十六年・殉難死節者取調書』 620・C7・11)
- ・篠原泰之進取調書
明治5年(1872)8月 元新撰組隊士・篠原泰之進は、維新後「泰泰之進」「泰林親」と改名します。篠原は公家の愛宕通旭・外山光輔による反乱計画に関係した嫌疑をかけられ、司法省による取り調べを受けています。結果、事件には無関係と判明したのですが、その取り調べ中に篠原が無届けで旅行したことが咎められ、東京府に報告されていました。
(『明治五年・諸向往復留』 605・D2・3)